

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

How Elders Listened to Bogoras' and Jochelson's Recordings : Sound Culture of the North Pacific

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷本, 一之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001198

古老は Bogoras の録音をいかに聴いたか

北太平洋の「音の文化」

谷本 一之

口承によって伝承される歌や踊りをめぐって、現存するさまざまな記録を評価する「民族・歴史的座標軸」を定めるためには、古い音声記録・映像記録・文書・図像資料を、現在まで伝えられている口承伝承記録と照合させる作業が不可欠である。本研究は、ジェサップ北太平洋調査（以下では JNPE と略記する）の期間中にロシアの民族学者ボゴラス（Waldemar Bogoras）とヨヘルソン（Waldemar Jochelson）が蠟管蓄音機を用いて採録した音声資料と、われわれの海外学術調査プロジェクト¹⁾が1989年以降、極東シベリアで実施してきている現地調査で得られた録音資料とを綿密に照合・比較することにより、いわゆる「ジェサップ領域」における「音の文化」の実体を究明し、その時間的変化の過程を明らかにすることを目的とする。

本稿で扱うボゴラスとヨヘルソンの録音資料としては、インディアナ大学の「伝統音楽アーカイヴズ」²⁾が保管する JNPE 録音資料³⁾を11本のカセットテープにダビングしたものを使用する。そこには極東シベリアに在住するヤクート（サハ）、ユカギール、ツングース（エウエン）、チュクチ、コリヤーク、アジア・エスキモー（シベリア・ユビク）や、ロシア人移住者の歌や器楽音楽が含まれている。

われわれの研究プロジェクトは、極東シベリアとカムチャツカで実施した現地調査のなかで JNPE 録音テープを現地の古老に聴いてもらう形で、聴き取り調査を行ってきている。これまでの聴き取り調査の成果は、2篇の中間報告として発表されている。最初に発表した報告「その1」は、マガダンで実施したギジガ出身者からの聴き取りと、カムチャツカのアナウガイ（Anawgay）での聴き取りにもとづいている（谷本1994）。報告「その2」は、1996年にカムチャツカ半島北部のパレン（Paren）とマニリイ（Manily）でヨヘルソンの録音を使って行った、コリヤークの古老を対象とする聴き取り調査の成果を論じている（谷本1998）。本稿もやはり中間報告であるが、1990年にベヴェク地区のアヨン（Ayon）とウスチ・チャウン（Ust-Chaun）、さらにアナディリ水系のヤンラナイ（Yanranay）でも、ボゴラスの録音を使って試みたチュクチの古老からの聴き取り情報と、現存する伝承記録とを照合する作業を通して、北太平洋における「音の文化」を描き出す試みをしている。

1. ボゴラスのチュクチ録音

ボゴラスがチュクチのもとで採録した音声資料（ATL 3248; 3249）は、AMNH の「音

声資料カタログ」にもとづいて作成された Index Sheet⁴⁾によると、ひとりの男がうたうチュクチの歌 11 件、ひとりの女がうたう歌 1 件、いわゆる喉歌が 2 件、チュクチの昔話 2 件、巫歌 10 件⁵⁾を含むと記載されている。採録地点はいずれもマリンスキー・ポスト (Marinsky Post —— 現アナディリ) であるが、Index Sheet には演唱者の名前が記載されていない。

録音音声の聴き取りに際しては、採録スピードの変更や、録音面の劣化によって生じる雑音がさまざまな障害を惹き起している。採録スピードの変化がきわめて大きいため、男声と女声の聴き分けは特に難しい。加えて、ヘビーな雑音のために、ほとんど何も聴き取れないような事例も少なくない。さらに、ところによっては、伝統的生活を十分に経験した優れたインフォーマントが得られない場合もある。したがって、現地での聴き取り調査で得られる情報の信頼性に関しては、一定の限界があることも十分認識されなければならない。このようなフィールド・データの信頼性を検証するためにも、現代の伝承記録との照合が不可欠となるわけである。表 1 は、ATL 標本番号 3248 に含まれる 16 件の音声記録をめぐる、現地での聴き取り調査から得られた情報を要録したものである。同表には、試聴時にインフォーマントが思い付くままに発した断片的コメントを、調査者がメモ風に記したものが記載されている。同一欄には、異なるインフォーマントの与えたさまざまな情報が併記されている。16 件の音声記録はいずれも 1 回ずつ、逐次再生していったから、得られたコメントはいずれも「第一印象」の域を出ない。

表 1

ATL Nos.	Item Nos.	Ayon, Ust-Chaun settlements	Yanranay, Billings settlements *
3248	1	海岸チュクチの歌だ。 生活の厳しさを歌っているようだ。	ツンドラ・チュクチの歌だ。 静かな歌い方だから個人の持ち歌だ。 歌詞なし。
	2	たぶんヤクートの歌だろう。	チュクチの歌ではなく、おそらくエウエンのものだろう。 /heido/, /haita/, /khaitakh/ という言葉が聴き取れる。 チュクチ語に「/kh/ 音」はない。
	3	速くて聴き取れない。 たぶんユカギールの歌だろう。	自分の歌ではなく、他人の歌を歌っている。 歌詞は「私が歌うのは彼の歌。彼の言葉を私の口で復唱する」という意味だと思う。 「話す」という意味の語彙 /n-iw-qin (neuklen)/ が聴き取れる。
	4	ツンドラ・チュクチと海岸チュクチの歌がある。 カモメと若いアザラシの擬声が聴き取れる。	チュクチのものではない。 鳥の群の擬声が聴こえる。 チュクチ語では /o-o-o/ と言うが、試聴音では /a-a-a/ のように聴こえる。
	5	海岸チュクチの歌だ。 後者は若い娘について、「彼女は颯爽と歩く。彼女には水を汲み、ありとあらゆる雑用をこなす時間がある」と歌っている。 「赤ちゃん」を意味する /ne ne/ という語彙が聴き取れる。	チュクチのものではない。 たぶん巫儀だろう。/heheheij (ekhe-khe-e-i)/、つまり「君のために同じものを歌うだろう」とか、「疲れているが、歌い続けよう」という語りが聴こえる。

6	速くて理解不能だ。 たぶん海岸チュクチの歌だろう。 アビ（水鳥）の擬声 /u-k u-k/ が聴き取れる。 彼女は自分の恋人のことを、「彼が恋しくて逢いたい。遠くにいて、ここにはいない彼に」と歌っている。	速すぎる。たぶんチュクチの女の声だろう。 太鼓のリズムはチュクチ風でないから、たぶんコリヤークのものだろう。
7	喉歌（Pichyanen）だ。 喉歌ではない。おそらく唸り棒ではないか。	チュクチの女の喉歌だ。 スズメバチや蠅、さらには雷鳥、トナカイ、ユキホオジロの擬声が聴き取れる。これらの動物種はすべて「春」を示唆する。 トナカイの鳴き声や牧夫の叫びが聴き取れる。 また、アブや蚊に襲われたトナカイの仕草である、大地に体をこすりつける音も聴こえる。
8	喉歌か唸り棒のように思われる。	チュクチの喉歌だ。 発火弓（mily emil, mil'hmil'h）を用いて火を起こす音、ユキホオジロか鴨（jokwajo, yok'uayo）が水に飛び込むときの鳴き声。 トナカイの皮革から道具を用いて獣脂をこそぎとるときの音。 舌を長く垂らして走る橇曳き犬のあえぎ声。 牧夫がトナカイ群を囲に追いこむときの掛け声 /khat-khat/ が聴き取れる。
9	海岸チュクチの語り。	チュクチの男が語りをしている。 彼はまず「静まれ。これから昔話を語るぞ」と言う。 チュクチの間で広く膾炙している「ある孤児の話」だ。 聴き手の発する相づち /hm hm hm/ が聴き取れる。 「悪魔」を意味する /kelek/、「行く」という意味の動詞 /pEkirEk/、「家」を意味する /janangE/ といった語彙が聴き取れる。
10	海岸チュクチの語り。	チュクチの語り。 「昔々」という意味の /enmen/、「終わり」を意味する /eters/ といった語彙が聴き取れる。
11	海岸チュクチの歌で、歌詞はない。 初めの歌は、犬橇を走らせている人を歌ったものの。彼は、凍死しそうになったとき自分を暖めてくれた犬たちを褒めちぎる。 最後の歌では、ある夫が「私は家族を愛し、良い生活を送っている」と歌いあげる。 この種の歌は、満ち足りた生活を送る人たちがよく歌うものだ。	あるチュクチの男の自分の歌だ。 チュクチのメロディーはとても緩やかで静かだ。
12	速すぎて分からない。	チュクチの歌だ。 太鼓を叩く音がするも、あまりに速すぎて機械音のようだ。 踊るときに発する /u-u-u/ という声だ。 チュクチが歌いだすときは、まず自分の歌から始め、それから他人の歌へと移るものだ。
13		#12 と同じ。
14	3つの歌あり。最後の歌は、「何事も起こらぬだろう /Aman Karen/」という語句が聴き取れるから、たぶん古い歌だろう。 たぶん Ivtegin の歌であろう。	解らない。
15		あるチュクチの男の個人歌だ。 太鼓の音はするが、歌詞なし。 「私は続ける」「私は手太鼓（jarar）を叩く」「私は今歌おう」といった文句が聴き取れる。
16		あるチュクチの青年が歌っている。 太鼓の音がする。 鳥や動物の擬声が聴き取れる。

* 「海岸チュクチ」と「トナカイ・チュクチ」の区分はインフォーマントによる。

* Yanranay はプロジェクトのメンバー大島稔の聴き取り。

Index Sheet は #1 から #5 までのものを一括して、「男（あるいは女）が演唱するチュクチの歌。マリンスキー・ポストにて採録（チュクチ）」と注記している。これは、チュクチが歌うチュクチの歌と解釈できるものの、われわれのインフォーマントが与えたコメントとは符合しない事例がいくつも認められる。例えば、インフォーマントは #2 をヤクートやエウエン、#3 はユカギールとしているが、#4 と #5 はいずれもチュクチではないと判断している。このくいちがいにはいくつかの理由が考えられるが、そのひとつとして、いずれのものにも太鼓の音が欠如することがあげられる。現代のチュクチやコリヤーク、そして新旧両大陸のエスキモーは、シャマンの巫儀に際してのみならず、儀礼をはなれた日常的な歌をうたう場合にも太鼓を叩きながらうたっている。したがって、インフォーマントは、ボゴラス録音における演唱のように太鼓の伴奏を欠く歌を、巫儀に際してのみ太鼓を用いるエウエンやヤクート、ユカギールの歌と判断したのではないかと思われる。しかしながら、チュクチの歌（例えば #13、——「応答形式で太鼓伴奏付きの巫歌」）の場合でさえ、巫歌では手太鼓の伴奏が記録されているのに、非儀礼的な歌ではそうになっていない。同じことは、チュクチと同様に、今日では日常的な歌にも太鼓を使用するコリヤークの古い音声記録⁶についても言うことができる。これは、チュクチやコリヤークがかつて非儀礼的な歌に際しては太鼓を使用しなかったのではないか、という推測を生むことになる。チュクチの事例でかかる推測を補強するのは、太鼓のリズム形式である。チュクチの日常歌での太鼓のリズムは、素早い「等拍連打」である。このリズム形式は、チュクチのシャマンも含めて、シベリア諸民族の巫儀に共通するものであるから、非儀礼的な歌に伴う「等拍連打」のリズムは、明らかにシャマニズムの残影である。チュクチの間では太鼓が各戸に見出され、その家や家族に帰属するため「家族の太鼓」という言い方がされる。チュクチによると、太鼓は「炉の声」であり、諸精霊の声を伝達する家の守護霊であるから頗る重要視されるという（Bogoras: 358）。つまり、チュクチにおける手太鼓の機能は、プロのシャマンの儀礼用具から、家族シャマンの手太鼓を経て、家族員なら誰でも使用可能な非儀礼的伴奏楽器へ向けて、変遷の過程にあることが判明する。

これはまた、チュクチの儀礼が芸能化の過程にあることも示唆している。このような現象はチュクチのみならずコリヤークにも認められる。ヨヘルソンはかかる変化を、「コリヤークの間では太鼓が家族儀礼の一部をなすばかりか、楽器でもあり、また日常的な歌唱や踊りに伴う伴奏でもあった」（Jochelson 1908: 55）と記している。

2. 太鼓の考察

チュクチの太鼓は、巾の狭い枠の外側に短い棒状の把手を取り付けた「外側把手太鼓」である。シベリア諸民族のうちでは、このほかにチュクチ半島の東端に住むアジア・エ

スキモーのみがこの「外側把手太鼓」を持っている。ボゴラスは「ツンドラ・チュクチと海岸チュクチの用いる太鼓が、その形や寸法に関してアジア・エスキモーのものと同一である」と述べて、チュクチの太鼓はエスキモーからの借用であったと主張する (Bogoras: 356)。チュクチ半島におけるわれわれの現地調査でも、チュクチは手太鼓と「坐り踊り (taliq)」をエスキモーから借用し、エスキモーの方は「喉歌」をツンドラ・チュクチから習った、という情報が得られている。

いわゆるジェサップ領域に在住する諸民族の間に広く分布する唯一の太鼓タイプは、丸枠に一枚の皮を張った「一面太鼓」である。その意味で同領域はまた「一面太鼓領域」とも呼べるが、その形状は円形、楕円形、卵形と様々であって、寸法もやはり地域や民族によってそれぞれである。しかしながら、太鼓に把手を取り付ける方法には歴然たる区分が認められる。シベリアの大陸部では、チュクチ半島のアジア・エスキモーとチュクチを別にする、と、「内側把手」の太鼓が使用されており、太鼓の裏側には木片や鉄片が交叉して差し渡されるか、交叉する紐が枠に取り付けてあって、いずれも交叉する部分を握るようになっている。これと対照的なのが「外側把手」太鼓であって、その分布はベーリング海峡を越えて、アラスカのエスキモー (Yupik, Inupiak)、カナダのイヌイト (Inuit)、グリーンランドのエスキモー (Greenlanders) にまで及んでいる。つまり、チュクチ半島東端を境界として、以西が「内側把手領域」、以東は「外側把手領域」ということになる。

この区分はまた太鼓の叩き方とも符合している。「内側把手太鼓」では皮面を叩くのに対して、「外側把手太鼓」の場合には、皮面ではなく枠の部分が叩かれるというように、太鼓の形状とその叩き方の間には一定の相関関係が認められるものの、そこにはいくつもの例外がある。チュクチ半島に暮らす現在のチュクチ、そしてアジア・エスキモーとアラスカ・エスキモーは「外側把手太鼓」を使用するが、チュクチと南西アラスカのユピクが叩くのは、枠ではなくて皮面である。ベーリング海周域では、太鼓のどの部分が叩かれるかだけでなく、叩く方向、つまり上から下か、あるいは下から上へ向けて叩くのかをめぐっても、さらに錯綜した状況が見出される。本稿では、新旧両大陸の中間に位置して、商業的交易の中継拠点でもあったセントローレンス島のキャンベル (Gambell) で実施した現地調査の成果に立脚して、太鼓の錯綜した使い方は、両大陸間の交換や交易を活性化させてきた、さまざまな氏族や民族の濃密な接触がもたらしたものであることを明らかにしたい。

私がセントローレンス島で現地調査に従事した 1979 年には、把手の反対側に当たる上縁へ向けて広がる「扇子状」の「外側把手太鼓」が使われていた。皮面は上から下へ向けて叩いていた。撥はまっすぐでなくて、中ほどがやや湾曲していた。このタイプの太鼓と撥は、セントローレンス島以外では見当たらない。シベリア・ユピク語圏に属する同島でアジア・エスキモーのものとは異なる形状の太鼓が認められるという事実をめ

ぐっては、セントローレンス島で暮らしていたヌポクという女性⁷⁾が1927～1931年に描いた数点の描画⁸⁾から、当時の太鼓は形状でもまたその叩き方でも、現在とは違っていたことが判明している。これらの描画は、1927～1934年にセントローレンス島でフィールドワークに従事した民族学者のガイスト (Otto Geist) が現地で購入したもので、これについてガイストは「これらの絵を私が購入した理由は、セントローレンス島エスキモーの日常生活が忠実に活写されていたからだ」⁹⁾と述べている。ガイストも記すように、そこに描かれている衣服、髪形、刺青などは、他の記録と照合しても、きわめて正確に描出されているように思われる。

手太鼓の形状や叩き方における変化は、いつ起きたのであろうか。この設問に対する解答は、私がアラスカのノームで行った1986年の現地調査で得られた。

セントローレンス島のサヴーンガ (Savoonga) からノームへ移住してきたニック・ウォンギットリン (Nick Wongittlin) は以下のように述べている。

「セントローレンス島の扇子状太鼓は、1949年にトーマス・アパシングク (Thomas Apasingok) が考案したものだ。扇子状であるのは、広げると扇子状になるセイウチの胃袋で太鼓に皮を張ったからだ。杵の形は、皮の形状に合わせている。また撥の形も、太鼓の裏側にうまくおさまるよう湾曲させたものだ」¹⁰⁾。

アパシングクは、セントローレンス島で最も著名な太鼓の名手のひとりで、彼の作った歌も多数伝えられている。太鼓の形状の変化は「伝統の枠内での個人の創意」の問題として扱うものであろうが、この変化はまた、ガイストが描画に付した注記において「ロシアのサモワールからアルミニウム製薬缶への転換」¹¹⁾と記したごとく、元来はシベリア・ユピック語系としてアジア・エスキモーとの間で強力に維持されてきた絆が、実際の日常生活では次第に薄れて、アラスカ本土、とりわけ南西アラスカとの関係が強まってきていることが背景にあると考えられる。人々の生活は、特にキリスト教宣教師の到来を契機として激変した。照明や煮焚きに使われたアザラシの脂を燃料とする伝統的の石皿ランプは、近代的なキッチンストーブや重油ヒーターに席を譲り、また1929年までには、板張りのアメリカ式木造家屋がすでに10戸前後も建てられていた。「外側把手太鼓」の皮面を上から叩くスタイルへの転換は、やはり同様な叩き方をする南西アラスカとの関係の緊密化を如実に物語るものである。

図1-3のヌポク (Nupok) の描画で見える限り、撥が当てられるのは皮面でなくて杵であること、しかも、杵上で対蹠的な位置にある2点を同時に叩いていることも明らかである。さらに太鼓のスケッチからは、皮面を「叩かない」というよりは寧ろ「叩けない」理由が読み取れる。ほとんどの太鼓では皮面の中央部に丸印が描かれているが、この丸印ははたして、単なる文様にすぎないのであろうか。この設問に対する解答を与えてくれたのは前記のウォンギットリンで、丸印は、その部分が特に薄いことを示すものだと

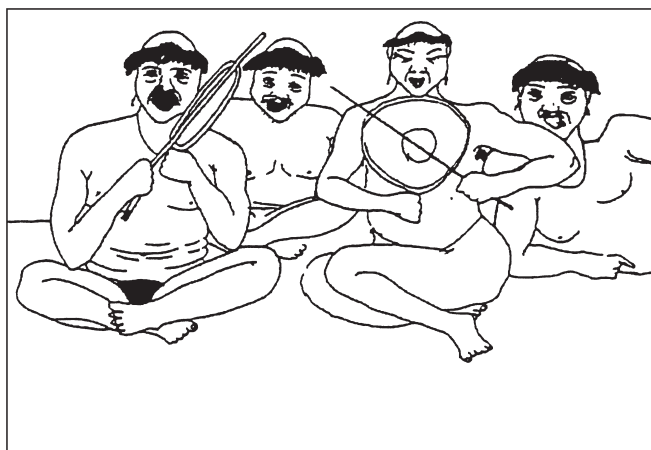


図 1

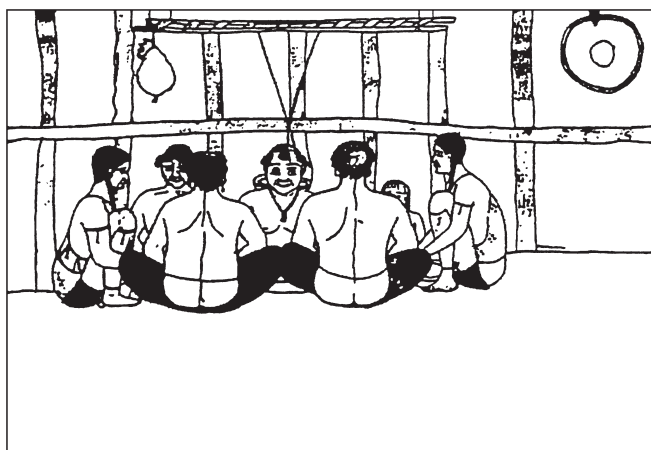


図 2

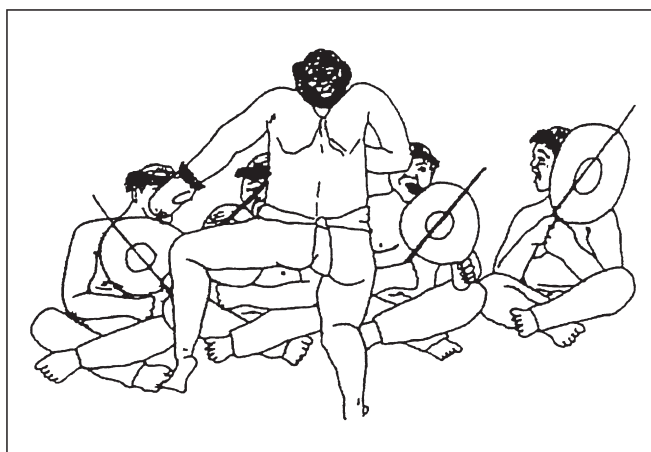


図 3

フローレンス・ヌボクのスケッチ（セントローレンス島，ガンベル，1927-31）。太鼓（円形）の皮面の中央に円，杵を下から叩いている。アラスカ大学附属図書館蔵

いう。彼の説明によると、皮面の中央部をまず水で湿らせてから、その箇所をセイウチの牙で丁寧にこすって、向こうが透けて見えるまで薄くするとのことだが、これは太鼓の響きを良くするためだという。こんなに薄ければ、皮面は一度叩いただけで確実に破れてしまう。これはまちがいがなく、皮面はじかに叩かない、もしくは叩けないことを意味していよう。皮面の中央部が薄くなった太鼓は、チュクチ半島のエスキモーも使用していたようである。チュクチ半島のチャプリノ（Chaplino）で実施した1992年の現地調査において、われわれは以下のような情報をアンカナウン（Ankanaun）から入手した。

「私がまだ子供だった1930年代には、皮面の中央部が頗る薄い太鼓を見たことがある。そのような太鼓を作ることのできる特別な男がチャプリノにもいたが、それ以降、このような太鼓は見たことがない」。

つまり、この頃から太鼓の叩き方が変わってきたものと推察される。チャプリノではさらに太鼓の叩き方をめぐって、以下のような関連情報も入手することができたが、情報はきわめて錯綜している。

「杵を打つときは細くて長い撥を使い、短い撥では皮面を叩く」。
「杵を打つとき、太鼓は背面を上に向けて握り、上から打つ。皮面を叩くときも太鼓は背面を上に向けて握るが、下から叩く」。
「かつては鯨の髯で撥をこしらえたが、今では木製の撥を使う」。

表2は、ベーリング海周域における「外側把手式」太鼓の叩き方をめぐって、現代の伝承をまとめたものである。

ベーリング海周域以外のカナダやグリーンランドでは、「外側把手」の太鼓は、次の歌に移る合間に皮面を連打するといった特別の場合を除き、杵のみを叩いている。またシベリア全域に分布する「内側把手」の太鼓の場合では、シャマンの巫儀のような特別の場合を除き、常に皮面を叩いている。これに対してベーリング海周辺では、太鼓の把手の付き方と叩く部分、そしてその叩き方の関係は上記にみるように大変入り組んでいる。例えばシレニキ（Sireniki）などいくつかの地域では、若者と年寄りの間で叩き方に違いが観察されている。ソビエト政権下で奨励され、今なおシベリア各地で広範な活動を展開している「民族アンサンブル」もまた、この太鼓の叩き方をめぐる錯綜した状況に拍車をかけているようだ。「民族アンサンブル」の多くは、いくつかの民族、例えばコリヤーク・チュクチ・エウエンといった、さまざまな民族の歌や踊りをそのレパートリーに組み入れており、その場合、それぞれの民族に固有の太鼓を使い分けるのではなく、どれかひとつの民族の太鼓で済ませることが多く、したがって、コリヤークの「内側把手」の太鼓の伴奏でエスキモーの踊りをおどるといったことにもなっている。現状

表 2

地域	持ち方	叩き方	叩く部位	撥
ウエレン	表・上	下から	皮面	中長
ナウカン	表・上	下から	皮面	短
シレニキ	表・下	下から	皮面	中長
タヴァイヴァン	表・下	下から	皮面	太短
プロヴィヂェニヤ	表・上	下から	皮面	中長
チャブリノ	表・上	下から	皮面	細長
キング島	表・上	下から	杵	細長
ダイオミード島	表・上	下から	杵	細長
セントローレンス島	表・上	上から	皮面	湾曲
アラスカ・ユピク	表・上	上から	皮面	細長
アラスカ・イヌピアク	表・上	下から	杵	細長
チュクチ	表・上	上から	皮面	細短
	又 横	又 横から		

*「表」とは皮の張ってある面のことである。

は錯綜しているが、文書や図像資料といった古記録は、やや異なる情報を提供してくれる。例えば、ボゴラスは以下のように述べている。

「鯨の髯の撥が使われる場合、太鼓は左手で支えて、撥の中ほどが太鼓の杵か、あるいは太鼓を支える手の拳に当たるように撥をさばく。すると撥の先端は、太鼓の頭部に向けて軽く振動する¹²⁾。木製撥の場合、手太鼓は皮面を上にして水平に支える。撥はその中ほどを右手で掴み、太鼓の杵を下から交互に叩く」(Bogoras: 357)。

ボゴラスの指摘するように、太鼓は皮面を上にして支え、杵は下から叩かれるのである。ここで注目されるのは、杵の両側を交互に叩くやり方が、カナダのイヌイットの間でも見出されるという事実である。

いずれにせよ、ベーリング海の兩岸に在住するさまざまな言語集団や民族集団の間に認められる錯綜した文化混交の現象は、チュクチ半島とアラスカの間で展開された間断するところのない交易関係を背景とするものであり、このような文化情況は、特殊にベーリング海周域に設定されうる「経済圏」とも重なりあっている。この経済圏の内部では、ヨヘルソンが「交易ダンス (trading dance)」(Jochelson 1928: 221) と名付けた、太鼓を叩きながら歌いかつ踊るという形をとる「太鼓踊り歌 (drum dance song)」が、交易の場では常に演ぜられていた。こうした機会にうたわれる歌は、以下の歌詞に見えるように、交易品やその値段について対話を交わすという格別な役割も担っていた。

「モーターボートのギヤが壊れちゃった。このロシア・パンをお前のギヤと取り換えようじゃないか」¹³⁾。

ベーリング海周域の諸民族が繰り広げる「太鼓踊り歌」のなかで観察される儀礼の芸能化過程は、儀礼を目的とした祭事から、交易を目的とする祭事へと変貌してゆく過程とも、歩みを共にしている。

3. 喉 歌

インフォーマントたちはボゴラス録音 (ATL 3248, #4, #6, #7, #8, #16) を聴くなかで、動物・鳥の鳴き声や昆虫の羽音等の擬声を聴き取っている。その内容は「鳥の群」「アビ」「スズメバチ」「蠅」「雷鳥」「トナカイ」「ユキホウジロ」「虻」「蚊」などであった。そのほかの録音の聴き取りでは、「カモメ」や「黒ケワタガモ」(ATL 3248, Track 2, #11), また「子犬」や「狼」(ATL 3249, #5) などともコメントされた。チュクチ以外の録音に関して言えば、ヨヘルソン採録のユカギール資料 (ATL 3245, #12, #13, #14) に付された注記には、「ユカギールの巫歌。ツンドラ方言、動物の擬声を含む。おそらくヤサーチナヤ河畔にて採録」と記載されている。別のもの (ATL 3246, #9) に付された注記には「男が動物の擬声を含むツングースの巫歌をうたう。コリマ河畔にて採録」とあり、ツングースの巫歌のなかにも動物の擬声が記録されている。巫儀の間には、この種の擬声が頻繁に発せられていた。ヨヘルソンとボゴラスは、シャマンの守護霊や動物の精霊自身の声として巫儀の最中に発せられる動物の擬声を列挙して、例えば、「狼の唸り声」「渡鴉の叫び」のように具体的に記載している。ヨヘルソンはまたユカギール語による動物や鳥の擬声を、以下のように音声表記で記録している (Jochelson 1926: 206.)。

- | | |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1. ga, ga, ga, ga | カイツブリ (ča'lgén) の擬声 |
| 2. čok', čok', čok' | シギの擬声 |
| 3. turri, turri, turri | 別種のシギ (ユカギール語で čirmi'die) の擬声 |
| 4. kurr, kurr, kurr | 別種のシギ (čirmi'die) の擬声 |
| 5. ku'ku, ku'ku, ku'ku | カッコウ (kukuno'do) の擬声 |
| 6. pil', pil', pil' | 鷺 (xa'nil') の擬声 |
| 7. ki'ñirik, ki'ñirik, ki'ñirik | コウノトリ (u'dil') の擬声 |
| 8. o-o-o-o | 狼 (eu'reye-ru'kun) の擬声 |
| 9. goo-goo-goo | 熊 (xa'ičitege) の擬声 |

動物や鳥をめぐって擬声が多数存在することは、人間と動物の儀礼的關係を示すものであり、シャマンの巫儀以外にも様々な儀礼に登場する。

カムチャツカ半島のパレンで実施した 1996 年の調査では、熊を獲った家で、皮を剥いた熊の頭蓋を松の葉やビーズで飾り、客人が来ると、家人のひとり (通常は年配の女

性)と客人が、熊の頭蓋骨に覆いかぶさるようにして、互いに競いながら強い喉声で熊の唸り声を発し続けるのを観察している。これは、殺したことを熊に謝罪する儀礼で、熊を獲った時からほぼ1ヵ月続けられる。ひたすら謝罪することによって熊と和解しようとする、狩猟後の「頭蓋崇拜」儀礼の効果は、強い喉声の力によって担保されている。またこの関係は日常の歌にも維持されていて、動物の擬声をリフレインとする歌が多くうたわれている。例えばチュクチ半島のタヴァイヴァン (Tavaivan) で採録した歌には、白熊、セイウチ、トナカイ、カラス、アビ、梟、鷺、カササギ、カモメ、狼、狐などの擬声が収録されている。

ボゴラス録音 (ATL 3248 #7, #8) に聴き入るインフォーマントたちは、そのなかに「喉歌」も聴き取った。Index Sheet には「Guilo song; いわゆる喉歌。マリンスキー・ポストにて採録 (チュクチ)」と注記されている。

シベリアのシャマンが発する声は、非日常的な人工的に加工された声である。呼吸や吸気が強く絞られた声帯を通過する際に作りだす発声 (口蓋垂・咽頭・声門など喉の奥の方で作る有声・無声の摩擦音) には呪力があると信じられている。この喉歌を使う遊び (喉遊び) が北方諸民族の間に広く分布しているが、なかでも樺太アイヌの「レクフカラ (rekuxkara)」とカナダ東部のイヌイットの「カタジャク (katajjaq)」は、その分布の地理的な隔たりにもかかわらず、あるいは寧ろその隔たりの故に、両者の構造・内容・機能における類似が特に注目されてきている。両者とも、顔が触れあうまでに接近したふたり (時にそれ以上のこともあり) の女性が、一方が高音を発すると、もう一方は低音で、長音には短音で応えるというように、掛け合いながら有声・無声の喉声を出し合う、競技的性格の強い遊びである。一方、シベリアの北東端に在住するチュクチ・コリヤーク・ユカギール・イテリメンなどに見出される喉遊びは、ふたり又はそれ以上の女性が向いあったり円く輪になったりして顔を寄せ合い、体をゆする動作をしながら喉声を出す。この輪は時々一列になったり、歩きながら互いに交差したりする。対面して立つか円陣を組み、顔を寄せ合って体をゆすりながら喉声を発し合うところは、レクフカラやカタジャクがほとんどその場を動かないのと対照的である。シベリアの喉歌に見られる動作や仕草には、特に意味の無いものもあるが、多くの場合、皮をなめすとか、火を起こすとかの日常の仕事の動作や、動物・鳥の動きを真似たりしている。ボゴラスは、チュクチの喉歌 (throat rattling) を採録するときの情景を、次のように詳細に解説している。

「娘らはそれぞれ自分の踊りを持っているが、いずれもさまざまな動物の動作や、一定の人間の仕草を模倣するものである。このような踊りは特定の歌、あるいは呼吸と吸気の交代で作られるリズムカルな喉声を伴っている。このような音声を発する行為は、「喉で呼ぶ (pic-eine'rkín)」と称されている。対面して立つか円陣を組むふたり又はそれ以上の娘たちは、それぞれが慎重に頃合いを計りつつ、間髪をいれず自分の出番をこなしながら、間断なく音声

を発してゆく。歌はしゃがれた低音で始まり、次第に高い声になってくる。娘たちは歌いながら自分の上半身を前後にゆすったあとで、自らの発する音に合わせてさまざまな模倣的所作を演じてゆく」(Bogoras: 268)。

現在のアラスカでは、喉遊びがユピク (yupik) やイスピアク (Inupiak) の間に見出されない。しかし、リリー・アパナガロク (Lilly Apanagalok) は1979年にセントローレンス島のキャンベルで、「昔、ふたりで向いあって、喉声を出して歌い合う遊びがあった、と祖母から聞いたことがある」と、語ってくれた。そして同島には、喉声は強調されないが、ふたり又は一列に並ぶふた組が向いあって歌い合う、喉遊びに似た競技的性格の強い遊びが伝承されている。このような状況から、アラスカにもかつてはこの喉遊びがあったものと推察される。

いずれにせよ、いわゆるジェサップ領域の諸民族にとって「喉声」は、日常性の世界から呪術や儀礼の世界へと導く仕掛けの基本となるものである。

注

- 1) 文部省科学研究費補助金による海外調査プロジェクト「北方諸民族芸能の比較研究」(平成14年度～15年度, 研究代表者・谷本一之)。
- 2) Archives of Traditional Music of Indiana University — ATL/EC。以下ではATLと略記する。
- 3) オリジナル蠟管は、ニューヨークのアメリカ自然史博物館 (AMNH と略記) が所蔵する。
- 4) Siberia: Bogoras and Jochelson Pre'54-149-F (Indiana University). Index Sheet は、Bogoras と Jochelson の蠟管録音をダビングしたカセットテープのカタログである。各曲ごとに蠟管とテープのナンバリングが明記され、録音状態、演者の民族名、演目、録音地等にも言及されている。
- 5) 10件の内訳は、応答形式の巫歌2、精霊の声を模倣する巫歌2、腹話術で演ずる巫歌数曲である。
- 6) 例えば、ヨヘルソン採録「手太鼓伴奏を伴うコリヤークの女シャマンの歌」——ATL-3245, #14。
- 7) Florence Nupok (1908–1971). ユピク語の名前は Nupaak。
- 8) 現在はアラスカ大学 (フェアバンクス校) 附属図書館蔵。
- 9) アラスカ大学附属図書館蔵 Otto Geist 手稿。
- 10) Nick Wangittlin 談。聴取時に81歳であった。
- 11) Geist 手稿。
- 12) 下線は引用者。
- 13) 1979年、セントローレンス島にて Fred Akomiyagok から採録。

参考文献

Bogoras, W.

- 1913 Chukchee Mythology. *The Jesup North Pacific Expedition Publications* vol.VIII: 1–197; and *Memoir of the American Museum of Natural History* vol. XII, Part I. Leiden: E.J. Brill, and New York: G.E. Stechert.

Jochelson, W.

- 1908 *The Koryak*. (*The Jesup North Pacific Expedition Publications* vol.VI and *Memoir of the American Museum of Natural History* vol. X). Leiden: E.J. Brill, and New York: G.E. Stechert.
- 1926 *The Yukaghir and Yukaghirized Tungus*. (*The Jesup North Pacific Expedition Publications* vol. IX and *Memoir of the American Museum of Natural History* vol. XIII). Leiden: E.J. Brill, and New York: G.E. Stechert.
- 1928 *Peoples of Asiatic Russia*. New York: The American Museum of Natural History.

谷本一之

- 1994 「古老は Jochelson のコリャク録音をいかに聴いたか (その1)」谷本一之編『北方諸民族文化国際フェスティバル・シンポジウム報告』pp.93–97, マガダン。
- 1998 「古老は Jochelson のコリャク録音をいかに聴いたか (その2)」大島稔編『カムチャツカ半島諸民族の生業・社会・芸能』pp.91–115, 小樽商科大学。

